令和6年度小松市立東陵小学校　学校評価　１（年度末）

めざす児童生徒像

○なりたい姿に向かってチャレンジできる子
○自分や友達のがんばりや成長を見つけたり、応援したりできる子
○自分で考えてすすんで行動（学習）できる子
○他者と話し合い、問題を解決したり、新しい考えを生み出したりできる子

※児童生徒結果－教員結果･保護者結果

	目標	項目	目標指標		評価達成度アンケート内容・調査項目	中間 数値・アンケート結果（%） 教員	児童生徒	保護者	中間 ※差	年度末 数値・アンケート結果（%） 教員	児童生徒	保護者	年度末 ※差	達成状況の分析	改善策
学校重点項目（学校で設定）	自己肯定感の向上	生徒指導	①②③の平均が 中間・・・８５％以上 期末・・・９０％以上		児童が「学校が楽しい」と感じている。	100	84.1	95.8	-15.9	100	86.8	92.6	-13.2	前回より「学校が楽しい」と感じている児童が4ポイント増加した。 「学級目標に近づけた」「成長や良さを伝えているか」については前回よりも微減している。教員と児童の意識の差が大きく開いており、教員が達成させたいことと児童が達成したいことにずれがあるように感じる。	・学校が楽しいと感じる児童が増えたことは嬉しい反面、児童が学校に期待することがより大きくなったのではないかと感じる。学校が楽しくなってきた児童の思いをしっかり受け止め、その子なりの成長や良さを教師たちこそ声に出し、認める必要がある。児童の成長が目に見るように評価する手立てが必要である。
					児童が「学級目標達成に近づけた」と感じ	80	83.2		3.2	100	82.5		-17.5		
					教員、保護者は、定期的に児童（一人一人）の成長やよさを伝えたり、児童に肯定的なメタ認知ができる場を設定したりしている。	100	81.4	97.9	-18.6	100	79.8	93.7	-20.2		
					集計										

	目標	項目	目標指標		評価達成度アンケート内容・調査項目									達成状況の分析	改善策
石川県共通重点項目	働き方や業務の改善		①②の平均が 中間・・・８５％以上 期末・・・９０％以上	①	80時間越えゼロに向け、時間外勤務の削減に取り組んでいる。	80				90				超過勤務が80時間を超えた職員はおらず、4～6月の超過勤務時間平均は45時間であったが、9～11月は37時間へと減少した。	担任業務、教材研究の時間確保のため、日課や支援員の配置等の見直し、校務の平準化等を進め、やりがいのある職場としていく。ガイドラインの月45時間、年360時間を意識した効率的な働き方を一人ひとりに意識させる手立てを続ける。
				②	学校組織の中で自分の役割が明確であり、創意工夫しながら取り組むことができてい	100				100					

	目標	項目	目標指標		評価達成度アンケート内容・調査項目	数値・アンケート結果（%） 教員	児童生徒	保護者	※差	数値・アンケート結果（%） 教員	児童生徒	保護者	※差	達成状況の分析	改善策
小松市共通重点項目	指導力の向上	学校研究	①②の平均が 中間…85%以上 年度末…90%以上	①	研究主題に迫る目指す授業スタイルを共有し、単元（授業）構想シートなどの具体的な取組を共通実践している。	80				100				①②ともに達成できたと答える教職員の割合が100%という結果になった。昨年度までの積み重ねの活用や研究授業にむけての各部会での取り組みの成果であると考えられる。 今年度は、研究授業にむけての研究会を低・高の２つに分けて実施した。それぞれ人数の母数が少なくなったので会を開きやすくなったことや、一人一人がより主体的に会に参加できたことなどの良さがあったと考えられる。	①②ともに、目標指標を達成することはできたが、児童の様子から、①の「授業スタイルの共有」に関しての取り組みが少し弱かったように感じる。 来年度は、学期末だけではなく、取り組みに対する中間評価を行いたい。そしてその結果をもとに、低･高学年部会で取り組みの見直しをすることで、教職員一人一人が、より主体的に授業スタイル実現のために授業改善できると考えられる。
				②	授業研究では、教職員一人一人が子供の姿を語ったり、改善案を示したりするなど主体的に取り組んでいる。	88.9				100					
					集計										
		「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善	①～④の平均が 中間…８０％以上 年度末…９０％以上	①	児童生徒は、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。	90	90.4		0.4	90	94.5		4.5	①⑤⑥より、約90%の児童は、授業の中で「課題の解決に向けて考えること」「ICT機器を活用すること」ができており、振り返りによって「学びを実感できた」と感じていることが分かった。児童が考えたくなるような発問や授業展開、ICT機器を活用できるような教材の工夫、振り返りの時間の確保など、日ごろの教材研究の成果が現れていると考えられる。 一方で、②③④など、自分の考えを友だちに表現することや、話し合いから考えを深めることになると、「できている」と感じている児童の割合が90%に満たない。このことから、授業の中で自分の考えを伝わるように考えて話したり、友だちの考えを聞いて自分の考えを深めることに課題意識を感じている児童が少数いることが分かる。また、教職員と児童のアンケート結果を比べると、教師の肯定的な回答よりも児童の肯定的な回答の方が割合が少ない。このことから教師が思っているよりも、「できていない」と感じている児童がおり、意識の差があることが分かる。	依然として課題になっている③の項目は、授業改善でしか解決できないものである。ペアや小グループでの話し合いは抵抗なくできているので、以下の様な指導に取り組む。 ペアや小グループの活動の中で自分の考えをノートや学習用端末に文・図・式などを使って表し、それらを使いながら伝えることを指導する。教師は、望ましい伝え合い、話し合いができているペアやグループを取り上げ、話し合いの仕方のよさを学級全体に広める。これを意識して繰り返し、③の力がついてきたことを積極的に認めることで、子ども達自身が力をつけてきたことを実感していけるようにする。それを教科、特別活動など様々な学習活動の中で積み重ねる。
				②	児童生徒は、学級の友達との間で話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり，広げたりすることができている。	90	85.2		-4.8	90	81.8		-8.2		
				③	児童生徒は、自分の考えを発表する機会では，自分の考えがうまく伝わるよう，資料や文章，話の組み立てなどを工夫して発表している。	80	72.2		-7.8	80	72.1		-7.9		
				④	児童生徒は、話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、友達の考え（自分と同じところや違うところ）を受け止めて自分の考えを伝えている。	90	87.8		-2.2	90	87.3		-2.7		
				⑤	児童生徒は、振り返る活動の中で、授業の目標に沿って自分の学びの変容を実感したり，学びに対する達成感を得られたりしている。	90	88.7		-1.3	80	89.1		9.1		
				⑥	児童生徒は、コンピュータなどのICT機器を、他の友達と意見を交換したり、調べたりするために使用している。	90	93.9		3.9	90	94.5		4.5		
					集計										
	学力の向上	カリキュラム・マネジメント	①②③④の平均が 中間…８５％以上 年度末…９０％以上	①	指導計画の作成に当たっては、学校の教育目標の実現に向け、各教科等の教育内容を教科横断的な視点で組み立てている。	90				100				①～④いずれの項目においても教員アンケートの結果は，年度末目標指標の90%を上回った。 ①～③においては，学期ごとにカリキュラムマップを活用し，教科横断的な教育課程編成や学力向上の手立てについてふり返り，次学期の計画を立てるPDCAサイクルを確立することができた。教科と教科を関連付けて実施したり，教科と総合的な学習や学校行事をつなげて実施したりすることができた。学力向上の取組では，課題となる単元をカリキュラムマップに重点単元として位置づけ，授業改善に努めることができた。また，帯タイムとも連携させて「基礎と活用の力」をつける取組を実施することができた。毎月「PDCAの会」を実施し，C（評価）A（改善）を確認し，全体共有することができた。 ④おいては，学力向上の取組を中心にして情報交換や共有を図ったり，授業参観したりして連携することができた。	①②カリキュラムマップでは，各教科の年間計画（道徳別葉、キャリアを含む）を学期ごとに検証し見直し，効果的に活用することができた。来年度も児童の実態を把握し，学力向上につながるように修正を図りながら、更に効果的なカリキュラムマップを作成し活用していく。また、C（評価）A（改善）を効果的に設定し、無理なく効果的にPDCAサイクルを回せるようなシステムを更に整備したい。 ③学力向上の「朝・帯タイムの取組」は，児童や教員がスムーズに判断できるよう年間を通して、内容を変更せずに実施してきたので、短い時間でも効率よく取組むことができた。全校共通システムとして機能させることを意識し、改善を図りながら進めていきたい。
				②	児童生徒や学校、地域の実態を捉えて教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のＰＤＣＡサイクルを確立している。	100				100					
				③	全職員が学力向上の取組の目的や意義を理解し、課題の解決を期待できると納得して共通実践に取り組んでいる。	100				100					
				④	校区の小・中学校間で学力について情報交換し、課題について共有している。（小中連携）	100				90					
					集計										
		家庭学習	①3年生以上の「家で計画を立てて勉強している」 ②「家庭学習で学習用端末を活用する」 中間…８０％以上 年度末…９０％以上	①	家庭学習の取組として、学習方法や課題の課し方等を校内で共通理解を図っている。	100	77.9		-22.1	100	71.4		-28.6	教職員アンケートにおいては，①②ともに達成の割合が100%となった。しかし児童アンケートでは①の達成の割合が減少し71%，②では中間より増加したが78%にとどまり目標指数を達成することができなかった。家庭学習における計画性や学習方法への満足度、達成感が十分とはいえないと考える。	家庭学習において，学習の目的や計画性を意識させ学習に取り組んだ。自主学習においては，内容や質の向上に繋がったので継続していく。家庭学習の計画や学習方法については，日頃から開始時間や目標時間を意識させていく。学習用端末の積極的な活用を含め宿題の位置付け方等見直していく。家庭と連携しながらメディアや睡眠時間も併せて考えていきたい。
				②	学習用端末を活用した家庭学習に取り組めるよう課題を工夫している。	90	73.5		-16.5	100	78.1		-21.9		

				集計										